

論文審査の結果の要旨

氏名 佐藤 恵

佐藤恵氏の論文「社会的相互作用過程におけるレイベリング」は、近年問題となっている社会的弱者を、アイデンティティ管理というテーマに収斂させ、そこから当事者の「力弱い」抵抗や、他者によるレイベリングからの脱出等を、主として相互行為場面でのプロセスにおいて、当事者のソフトな能動性の立ち上がりと、それらを支援するアドボケート行為、の両者の可能性検証に、理論的・経験的関心に向けて、展開したものである。論文は、レイベリング論が、カテゴリカルに社会的弱者のアイデンティティ定義の抑圧性をテーマ化した特性を認めつつ、しかし他方でその「決定的限界」を、被レイベリング者の受動的行為者化にみる（序章・1章1節2節4節）。これを突破するべく、シンボリック相互作用論の視点を転用しながら、当事者の能動的主体化を、アイデンティティの再構成と自己管理化へのプロセスへと推転させる（2章・3章）。こうした議論は、2つの資料の分析によって、その妥当性を検証させている。レイベリング論においては、1)性暴力被害者の事例研究から重層的被害が被害者の自己レイベリングに与える抑圧性について（1章3節）、2)文学作品を素材として扱いつつ、当事者が脱レイベリング化していくいくつかの類型を仮説的に提起し、アイデンティティ論においては、阪神淡路大震災における被災障害者とボランティアの自立・支援の相互行為の事例研究や、NPOの支援ミッションの再帰性と支え合いの事例研究（4章2節3節4節）、犯罪被害者のセルフ・ヘルプ・グループの事例研究においては、事象からのテーマ設定的問題提起（5章）等が詳細に展開されている。

従来、レイベリング論は、いかに被差別当事者が相互作用場面で、常に（「ここで、いま」）受動者化されてきたか、に論議の中心があり、そこからの主体としての「自立」や回復、アイデンティティ形成を、理論的にも経験的にも取り扱ってこなかった。本論文は、事例研究を介して、理論と経験において、アイデンティティ論へと収斂させつつある労作である。とくに4章の阪神淡路大震災における被災障害者とボランティアの自立・支援の相互行為の事例研究や、NPOの支援ミッションの再帰性と支え合いの事例研究は、脱レイベリング・アイデンティティ形成が、社会的強者／社会的弱者／社会的アド弱者のアドボケート、との三者関係という集団的関係の力学から、獲得され維持される、というアイディアは、今後の研究展開に大いに期待をさせるものがある。

他方、せっかくレイベリング論からアイデンティティ論へと推転しつつあるにも拘わらず、従って、社会的弱者の構造的定置論から、「自立」・主体性の回復への、プロセスをテーマ化したにも拘わらず、後者を記述するコンセプトに、依然として、相互作用論的な非時間的モメントがしばしば散見する。こうしたコンセプトの場違いな記述はすみやかに修正する必要がある。

しかし、本論文は、その展開性と先駆性において従来の研究水準を明らかに超えるものであり、博士（社会学）の学位を授与するに十分値するものと判断する。